

小学校における音楽科教育の日中比較に関する研究

ー「箏」を中心とした器楽分野の授業モデル案の開発と、伝統音楽の指導スタイルの考察ー

芸術教育専攻 音楽科教育学領域

劉宇超

筆者は、大学時代に中国の小学校で音楽教師の助手としてボランティア活動を行ったり、民間の音楽教室で古箏の教師として児童に教えたりした経験がある。このような経験から、中国と日本の音楽科授業の比較に基づいて、特に伝統楽器を用いた器楽分野の授業モデル案の開発について研究したいと考えるようになった。

本文では、中国の『音楽課程標準（2011年版）』と日本の文部科学省『小学校学習指導要領音楽編（平成29年告示）』の両国の音楽指導要領と比較分析し、日本と中国の学校教育における伝統音楽の指導実践に関する先行研究の分析に基づいて、中国と日本の音楽科授業の良い部分を整理して、次の3つの課題を解決する授業方法や指導方法を開発した。

①中国では、伝統楽器を学習する際も、入門曲は伝統音楽ではなく、簡単な曲を自由に選んで弾かせている。そうすると、生徒たちは親しみのある現代の曲を選んでしまい、伝統音楽は理解しにくくて弾きたくない傾向が見られた。したがって、伝統楽器である箏を弾いても伝統音楽に親しむ機会が少ない状況で児童・生徒の伝統音楽に関する興味関心を持続させる授業の工夫。

②中国では、一般的に小中学校の1クラスに70人以上の児童・生徒がいる。音楽の授業もクラス単位で行われ、教師が一斉に児童・生徒に指示を出して授業を行っている。児童数・生徒数がとても多いことから、教師は一人ひとりに十分な配慮ができないため、児童・生徒は積極的に活動をしなくなってしまい、結果として質の高い授業がうまく運営できていないように思われる。このような児童・生徒数が多い、楽器の数が足りない状況で、知識の裏付けを伴った技能を身に付けさせる指導方法や授業案の工

夫。

③学校の器楽分野の授業では、学習内容のレベルがだんだん高くなるにつれて、授業についていくことができず、興味や関心をなくすことが考えられる。ついていけない児童・生徒にあわせて目標を簡単にし過ぎて活動のレベルを低くすると、他の児童・生徒には物足りなく感じられて興味や関心を失うことが懸念されることである。このような状況で、知識や技能の能力差がある児童・生徒に対する授業運営と指導方法の工夫。

以上の学校教育で箏をとおして伝統音楽に親しませる理由に基づいて、「箏をとおして伝統音楽に親しむ授業の指導試案」を作って、箏の指導をとおして伝統音楽に親しませる重要性について説明した。

今後の研究では、今の時代に合うように、主に箏を中心とした指導方法や授業案を具体的で実践的なものに高めたい。また、伝統音楽を維持し継承することを通じて、伝統音楽を発展させることにもつながるものを開発していきたい。